逃げる男

山内　詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
逃げる男

【Ｎコード】
Ｎ０９１３Ｔ

【作者名】
山内　詠

【あらすじ】
その副官の仕事には上官の愛人という仕事も含まれていて……。
とある軍隊に所属する中佐とその副官である軍曹の物語。逃げる男に追う女。

（前書き）

勢いで書きました。雰囲気だけの話です。

寝室に入ったら目の前に理想の女がいた。

その女――――タリヤは「お疲れさまでした」と一礼した後ヴァルの前で着ていた軍服を何の迷いも無く脱ぎ始めた。
あまりの出来事にあんぐりと口をあけたまま呆けているヴァルの前で下着姿になるとヴァルの白いシャツをはおりベッドの端にちょこんと座りこんだ。そしてゆっくりと髪を解くと纏めていたせいか大きくうねりながら華奢な肩に広がる。
白いシャツの袖口からは指先がちょっとだけ、見える。ヴァルの喉が、ごくり、と鳴った。
その僅かに見える指先を口元に寄せて、タリヤははにかんで頬を赤らめながら微笑んだ。

「こういうのがお好きですよね」

「いやいやいやそうだけど！！　なんで知ってるんだ！！！」

姿も仕草も、表情すらばっちり好みだった。だが。

「本日部屋の掃除を承りました時に失礼ですが本を拝見致しました」

大変参考になりました、とタリヤはまたはにかむ。

「はぁあああ！？」

部屋の掃除、で気づいた。寝室に置いてあったその手の本を片付けるのを忘れていた。というか、考えもつかなかった。

ヴァルは身の回りの世話をしてくれる副官なんぞ今まで持ったことがなかったので、突然配属になった副官にさせる仕事が思いつかなくてとりあえず書類の整理と部屋の掃除を頼んだ。
女性に見せるべきでない本が寝室にあるのは成人男性としては至極当たり前なことで、処分しておくのが礼儀だということは常識として理解しているがその時は全く思い浮かばなかった。というか部屋というとヴァルからすれば掃除を頼んだのは書類仕事をする執務室だけのつもりであったのだ。

ちらりと見やればその手の本はベッドの脇に並べてある。しかもどうやら種類によってきちんと整理されているようだ。恥ずかしい、猛烈に恥ずかしい！

「それと配属前に研修もありましたので」

一体何の研修なのか、聞きたいような聞きたくないような。ヴァルは大きくため息をつくと白いシャツの中で身体を泳がせているタリヤから目をそらした。
濃いブルネットの髪、同じ色の瞳に少し垂れた目尻、ぽってりとした唇、つるりとした頬。細い首、しなやかに伸びている背、大きすぎない胸に比べてやや存在感のある尻、太めの足。その全ては猛烈にヴァルの好みど真ん中だ。
当たり前だ。ヴァル好みの容姿を持っていたからタリヤはこの部隊に配属されたのである。
立場的にも実力的にもヴァルはタリヤを好きにしてもいい。むしろそのために経験や腕前の劣る軍曹クラスの若い女が中佐であり隊長の副官などに抜擢されているのだ。

これから事が発生しようがしなかろうがタリヤはこの部隊の副官でいる限りヴァルの愛人だと認定されるのである。

「中佐、どうぞ私をお好きにお使いください」

「いやしかし」

「私の職務にそれは含まれております。誓約書も提出させて頂きました」

「でも」

「隊長が気に病むことは何一つございません。私は私の信念に基づきこの職に就いたのです」

タリヤは満面の笑みで告げる。先ほどまでの恥ずかしげな表情は鳴りをひそめ、誇らしげな雰囲気まで漂わせている。
愛人兼副官ともなれば女性士官の中では高給取りだ。しかし女であれば誰でもなれるわけではなく、容姿や適性が合わなければなりたくてもなれない。幹部の側に常に付従うことが出来るという普通ならできない貴重な経験もできる。軍において公式に認められた役職であるから市井の娼婦のような扱いを受ける事も無い。
そして出会いが少ない軍隊という環境だからだろうか。この副官から夫人と立場を変える者も少なくないのだ。

タリヤはきらきらした瞳でにこやかにヴァルの躊躇を跳ねのける。
どうぞこちらへ、と腰かけているベッドを示されてヴァルは思わず頭を抱えた。

副官が与えられるような地位にいるのは大概が現場知らずのエリートたちで、だからこそ公式の愛人なんてものになりたがる女性士官がいるのだ。ヴァルはどこぞの士官学校出のエリートなんかでは全

く無い。他人よりも少々悪運がよく、上官の奴らがさっさと撤退した後の負け戦で武勲を拾って今の地位がある。泥と血を舐めて戦場を這いずり回っていたヴァルの副官になっても得るものなど普通の勤めより少しばかり多い給与くらいなものだろう。
愛人である副官を抱えるということに憧れはあった。軍属の男なら誰でも持っているだろう憧れ。何しろ自分好みの女が命令すればそれこそ文字通り尽くしてくれるのだ。

しかしヴァルにとってみれば憧れは憧れであって現実になるはずがないものだった。妄想は妄想だから楽しく好きなように出来るのだ。目の前にどうぞ食べて下さいと差し出された理想通りの女がいる。しかしそれを素直に美味しく頂けるような性格じゃないってことは自分が一番良く分かっている。
これが好きあった相手だったならもちろん遠慮はしない。だがヴァルは自前で遊び相手を見つける器用さは無いし女を惹きつける魅力（主に外見）も無ければお金を払って一晩の夢を買う度胸すら無い。……まあだからその手の本のお世話になっていたわけで。

「……タリヤ軍曹」

「はいっ！」

「上官として命じる。今すぐ服を着てここから出て行きなさい」

タリヤの笑顔がすぐさま曇る。

「何かお気に召さないことがありましたでしょうか？」

「気に入る気に入らないの話じゃないんだ」

お気に召さないどころか鼻血が出そうなほどに気になっている。

「では、下着に白シャツではなくて、裸にエプロンの方がよかったでしょうか？

それともタイトスカートにガーターストッキングでしたか？」

……見られている。その手の本の内容をしっかりチェックされている。言われてすぐさま裸エプロンのタリヤが想像できた。まずいまずいまずい。

「私、頑張ります！　中佐お好みの女になりますから！」

いやもう十分にヴァル好みの女なのだ。好みすぎてヤバいくらいなのだ。

タリヤが身動きすれば白いシャツから透けて見える黒い下着（猛烈に好み）や太もも（やや太めで柔らかそうにぷるぷるとしているのが堪らない）がヴァルを雄の部分を刺激し続ける。速やかにこの部屋から出ていって貰わなければ！

「早く出て行きたまえ」

ヴァルはタリヤに背を向けた。始めからこうしていればよかった。見なければよかったのだ。

しかし残念ながらそれは失敗だった。

ふにゃり。

背中にふたつ温かく柔らかなものを感じて、ヴァルは固まった。

想像が正しければこれは恐らくタリヤの。

「中佐……どうか私に身を任せて下さいませ」

それって女が男に言うセリフか？

幾多の死線を潜り抜け絶望の戦場から何度も戻ってきた奇跡の男と呼ばれるヴァルが逃げられないかもしれないと覚悟した瞬間であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0913t/

逃げる男

2011年5月9日12時16分発行